AUE News

2012年12月1日

第 52 号

編集・発行
愛知教育大学広報チーム
TEL 0566-26-2738
FAX 0566-26-2500

目　次

● 行事予定(12 月 1-15 日)
● トピックス
・第 1 回日本・インドネシア学長会議に松田学長ら参加
・第 6 回科学・ものづくりフェスタ@愛教大
・第 77 回天文台一般公開
・教職大学院フォローアップ研修会
・陶芸カフェでコーヒー茶碗を愉しむ
・附属幼稚園児が実習園で芋掘り
・永年勤続表彰式
・花プロジェクトの植栽作業
・刈谷アクアモールイルミネーション点灯式
・総合防災・防火訓練
● 愛教人インタビュー
・星博幸准教授らの論文が英国科学誌「Nature Geoscience」に掲載
● お知らせ・報告・投稿
・大学院生の金田早織さんが工芸展で受賞
・会計関係事務研修
・文科省関係機関等教職員駅伝競走大会
・国立大学協会定期総会
・木村博昭教授が書作品を刈谷市に贈呈
・地域連携フォーラム 2012
・真島聖子准教授が刈谷税務署長表彰
・インドネシア・スラバヤ大学との学術交流協定更新と学生交流
・催しもの案内

行事予定(12/1-15)

4 日(火)　役員部局長会議（13：00～　学長室）
　　教育実地研究専門委員会（15：00～　第五会議室）
5 日(水)　教務企画委員会（13：30～　第二会議室）
　　学生支援委員会（13：30～　第五会議室）
11 日(火)　経営協議会（10：00～　ＫＫＲホテル名古屋）
　　役員会（14：00～　学長室）
12 日(水)　代議員会（13：30～　第五会議室）
　　教育研究評議会（代議員会終了後、第五会議室）

トピックス

第 1 回日本・インドネシア学長会議に松田学長ら参加(11/15,16)

東海地区の 5 国立大学（名古屋大学，岐阜大学，豊橋技術科学大学，三重大学，本学）が主催し，名古屋大学を会場に 11 月 15 日(木)，16 日(金)の両日，「第 1 回日本・インドネシア学長会議」を開催しました。

14 日(水)の会議前日は、インドネシア共和国元大統領のバハルディン・ユスフ・ハビビ博士を囲んで 5 大学学長との夕食会が和やかな雰囲気の中で開催され、最後にハビビ元大統領から「Decisive Moments-Indonesia's Long Road to Democracy-」と「Habibie & Ainun」の 2 冊の著書が 5 大学学長に贈られました。

15 日からの会議には、日本側から 31 大学，イン

ドネシア側から 29 大学，計 60 大学が参加。本学からは，松田正久学長と宮川秀俊国際交流センター長が出席しました。

同会議は「連携のための対話（A Dialogue for Partnership）」がメインテーマ。主催大学を代表して濱口道成名大学長の歓迎の辞、続いて山中伸一文部科学審議官、ムハンマド・ヌー　インドネシア教育文化大臣、ムハンマド・ルトゥフィ駐日インドネシア大使、浅島誠日本学術振興会理事のあいさつがありました。

基調講演では、日本側からトヨタ自動車代表取締役副社長の小平信因氏によるトヨタ自動車の紹介や社内研修制度などの講演、昼食をはさんで、午後からハビビ元大統領が、インドネシアの民主化をはじめ、これからのアジア、日本とインドネシアの関係の在り方など示唆に富む講演をされました。その後、五つのテーマに分かれて分科会が行われました。

松田学長は，三重大学江原宏副学長とともに、第４分科会（テーマ：「国際共同教育の実質化－ダブルディグリー、サンドイッチプログラム、研究ベースの学生交流－」）の日本側の議長として参加。また、宮川国際交流センター長は、モデレーターとして、本学との協定校であるスラバヤ大学長ムクラス・サマミ博士の「高等教育のための国際共同教育（International Collaboration for Higher Education）」を紹介しました。同分科会では，四つの大学からテーマに基づく発表と参加者間での活発な情報交換が行われました。

その日の夕刻から、会場を名古屋東急ホテルに移し、レセプションが開催され、11 月 14 日（水）からＳＳ（ショート・スティ）プログラムにより本学を訪れていたインドネシア・スラバヤ大学芸術学部の学生が同国の伝統舞踊と歌を披露、ハビビ元大統領もマイクをとって学生たちとお気に入りの歌を披露するなど会場は大いに盛り上がりました。

最終日には、5 分科会のまとめと総括討論、5 大学による共同宣言が採択され、翌年のインドネシアでの開催を含め、大学間交流の一層の促進や高等教育の高度化のための連携等に関する対話を継続する方策を幹事大学が中心となって検討することなどが合意され、2 日間にわたる会議が成功裏に終了しました。

（教育創造開発機構運営課　副課長　前川由光）

第 6 回科学・ものづくりフェスタ＠愛教大(11/17)

科学やものづくりの楽しさを知ってもらおうというイベント「科学・ものづくりフェスタ＠愛教大」が、11 月 17 日（土）、第一共通棟で開催されました。6 回目となる今年は、教員・学生・協賛団体による科学実験やものづくりの 41 プログラムが実施され、約 700 人の来場者でにぎわいました。

あいにくの雨模様にもかかわらず、受付開始の午前 9 時から親子連れなどが続々と来場。「シャボンダマン!! 変身!!」では、子どもたちがすっぽりと大きなシャボン玉に入る体験ができるとあって、順番待ちの行列ができる人気ぶり。「星座早見盤をつくろう！」では、大人も子どもも星座早見表づくりに奮闘。「色炎反応とスペクトル」では子どもたちが薬品ごとに違う炎の色をじっと見つめて、不思議そうな表情で大学生の説明に聞き入っていました。「木工パズルづくり」では、好きな図柄を描いて、木のパズルを制作。学生の指導で電動のこぎりでパーツを切り取る作業にも挑戦してい

ました。

ランチタイムレクチャーでは澤武文教授（理科教育）が「今はいつ？―宇宙の始まり―」と題した講演を行い、来場者は宇宙の誕生や壮大な歴史の話に耳を傾けていました。

この日は、ＳＳ（ショート・ステイ）プログラムで本学を訪れた台湾師範大学生 10 人と教員 1 人が「科学・ものづくり教育支援のための情報交換プロジェクト」の一貫として参加し、会場を視察したり、ものづくりに参加するなどしました。

第 77 回天文台一般公開(11/17)

本学天文台の第 77 回一般公開が 11 月 17 日（土）午前 10 時から行われ、ミニ講座、3D 上映に子どもから大人まで幅広い方々、79 人が参加しました。観望会は雨のため天文台の見学のみとなりました。

3D 上映は、1 回 20 分程度で「太陽系の旅」と「宇宙の旅」の 2 番組を上映。澤武文教授（理科教育）研究室の学生が中心となって解説を行いました。飛び出す宇宙の映像に参加者は感嘆の声を漏らしていました。

午後 5 時からのミニ天文講座では、「今はいつ？―宇宙の始まり―」をテーマに澤教授が講演。宇宙が誕生して現在までどのように進化したのか、研究や観測から分かってきたことを解説しました。質問コーナーでは、講演内容やブラックホール、ニュートリノなど参加者の疑問への説明が時間の許す限り行われました。男子小学生も積極的に質問し、とても盛り上がりました。

今回は親子の参加が目立ち、中には以前学外での講演に参加して今回も参加してくれた方もいました。宇宙に興味を持ってくれる人が増えることは、私たちにとってとても嬉しいことでした。

（自然科学コース　宇宙・物質科学専攻 4 年　伊藤実彩）

教職大学院フォローアップ研修会（11/17）

本学の「教育実践研究科（教職大学院）フォローアップ研修会」が 11 月 17 日（土）、名古屋市中村区のウインクあいち（愛知県産業労働センター）で開催されました。

教職大学院は今年で創設 5 年目を迎え、今春、3 期目の修了生を送り出しました。大学院での 2 年間の学びを学校現場で活用していくために私たち教職員は修了後の支援（フォローアップ）を大事にしたいと考えています。今回、初開催となった研修会には、冷たい雨の降りしきる中、32 人もの修了生と現役の大学院生ら、そして私たち教職員とを合わせて 62 人が参加し、定員いっぱいの会場は熱気であふれかえりました。

日本女子大学の藤田武志准教授より、「今求められてる教職の専門性とは何か」をテーマとするご講演をいただきました。その後、修了生 3 人から現在取り組んでいる学校づくり・授業づくり・学級づくりの様子について実践報告があり、続いてグ

ループに別れての交流会が行われました。
研修会後のアンケートでは、「これからの教職のあり方について新しい視点を学ぶことができた」「仲間の頑張っている姿をみて、大きな刺激を受けた」「学校での悩みを相談できた」など充実した内容についての感想が寄せられました。　　（教育実践研究科　准教授　石井拓児）

陶芸カフェでコーヒー茶碗を愉しむ（11/18）

11 月 18 日(日)午後、秋晴れの一日を愉しむように本学現代学芸課程造形文化コースと教育学研究科美術専攻学生、卒業生、大学院修了生などに加え愛知県や岐阜県の陶芸作家等も参加して、

一人一品のコーヒーカップを制作、お互いが持ち寄った作品を評価しながら「コーヒーカップ」の物々交換を愉しむ「陶芸カフェ」が、美術第二実習棟陶芸室を会場に開催され、松田(学長)も参加しました。ちなみに、昨年は「抹茶茶碗」でした。

最初に、服部文孝瀬戸市美術館館長による「近代の陶芸」と題した講演があり、同美術館で開催された「明治・大正時代の日本陶磁－産業と工芸美術－」(巡回展で、現在茨城県美術館で開催中)の説明がされ、江戸末期から明治中期にかけて、多数の陶器が欧米諸国に輸出され、当時の作品のほとんどは外国にあり、日本にはほとんど残っていない実態、また当時のきらびやかな作品群が少しずつ買い戻され日本でも見ることが出来るようになって今回の巡回展が開催されたことなど、当時の日本の産地（もちろん瀬戸も入っています）の特徴などが紹介されました。

その後、東京国立近代美術館工芸課長の唐沢昌宏氏、美術館館長の服部さんらの順に気に入った作品を選んで、評価します。作品が推察されるプロの作家の作品は選ばないことを前提に、気に入った作品、魅かれた作品を選ぶのですが、私は 4 番目でした。私が選んだのは、全く珈琲カップからかけ離れた「カップ(らしき作品)」で、陶芸作家加藤智也氏(http://ameblo.jp/nanadaimedasu/)の作品でした。これを私が持って行った市販の量販品と交換したので「わらしべ長者」の境地でした。

観察していると、大学院修了生の作品群に続いて選ばれるのは意外にも学部 3 年生の作品でした。作品に込めた思いや何物にも縛られない斬新さがプロの作家にはうけるようです。中島晴美教授の話では、「少し勉強して考えるようになると感性の斬新さが失われ、それを乗り越えていくことに苦しさもあるし楽しさもある」とのことでした。プロの作家や学生たちとのコーヒーを飲みながらの会話の中で、外が暗くなるのを知らずに愉しんだイベントでした。

（学長　松田正久）

附属幼稚園児が実習園で芋掘り（11/19）

附属名古屋幼稚園の園児たちによる恒例のサツマイモ掘りが 11 月 19 日（月）、本学の実習園で行われました。

園児たちは年中クラスの 55 人。バスで 1 時間余りかけて大学へ到着し、実習準備棟前で帽子に手袋、長靴と身支度を整えて、元気にサツマイモ畑へと向いました。畑を管理する長友武志さんから「5 月に植えたサツマイモが、今年はとっても大きくなりました。頑張って掘ってください」とあいさつがあると、園児たちは「おいも、掘るぞ～！」と元気いっぱいに声を上げました。また、

この日は 10 月に附属幼稚園で教育実習をした幼児教育選修の 3 年生 14 人が、事前に芋のつるを払うなどの準備をして園児たちをサポートしました。

秋晴れの下、園児たちは奮闘。自分の顔ほどの大きなイモが掘れると目を丸くしながらも大喜び。用意した袋もいっぱいになって、「重い～」と満足そうな笑顔でした。

園児たちは収穫作業を 1 時間ほどで終了すると、畑の近くでお弁当を広げて昼食をとり、長友さんや実習生にお礼を言って、実習園を後にしました。

この日、収穫した芋は 100 kg余り。一人 2 kgずつ家庭に持ち帰るほか、幼稚園で蒸かし芋などにしておやつにする予定。

永年勤続表彰（11/21）

2012 年度永年勤続表彰が 11 月 21 日（水）午前、第五会議室で行われました。

この表彰は本学勤続 20 年以上の教職員が対象、今回は、野田敦敬教授（生活科教育）、吉岡恒生教授（障害児教育）、田口尚之教授（国語教育）、尾崎俊介教授（外国語教育）、久野陽一教授（同）、高橋真聡准教授（理科教育）、中野博文准教授（同）、新山王政和教授（音楽教育）、山根真理教授（家政教育）、古川健係長（財務企画課）、福井千都係長（情報図書課）、島村瑞穂係長（同）、澤田文男係長（学生支援課）の計 13 人。

この日は、このうち 7 人と役員、学系長、部長らが出席し、松田正久学長から一人一人に感謝状と記念品が手渡されました。松田学長は「永年勤続おめでとうございます。法人化して 8 年、元の国立大学時代と違い、厳しい状況下で大学を運営し、その中で今日の日を迎えられたことは喜ばしい。20 年の蓄積の上に立ち、先生方は研究、教育を、職員の皆さんは教員や学生を支えていただき、さらに頑張っていただきたい」などとあいさつ。

これを受けて、永年勤続者を代表して野田教授が「この場を設けていただき、ありがとうございます。振り返ると先輩や周りの人々の支えがあって 20 年間がありました。自分を見つめ直し、今後も本学の発展のために尽くしていきたい」と感謝の言葉とともに新たな決意を述べました。式の後には、講堂前で記念撮影が行われました。

花プロジェクトの植栽作業（11/21）

本学では、大学構内の環境整備の一環として「花プロジェクト」に 2012 年 1 月から取り組み始めました。同プロジェクトは施設課の若手職員が中心となって動いています。3 度目となる植栽作業を 11 月 21 日(水)に実施し、構内の様々な場所で、ビオラ、プリムラジュリアン、ハボタン、デージーなどの花の苗約 900 株を植栽しました。

当日は秋晴れの中、有志の学生・事務職員が約 30 人集まり、複数回参加されている方も多く、手慣れた手つきで植栽が始まりました。単一色で「統一感」を出すのが今回のテーマで、黄色、オレンジ色、赤色などの暖色系の花々を配置して見る人の心が温まるよ

うにと考えました。また、バス停北側の斜面ではレンガでハートマークを型どり、枠内に黄色のビオラを、枠外には白色のビオラを植栽しました。

10 月に第二福利施設南側で種まきを行った菜の花の間引きも行い、間引いた菜の花は各自が自宅に持ち帰って、おひたしや炒め物、鍋にするなど秋の味覚も楽しみました。

（財務部施設課　技術専門グループ　倉橋幸佑）

刈谷アクアモールイルミネーション点灯式（11/24）

刈谷駅前の冬の風物詩「アクアモールイルミネーション６」の点灯式が 11 月 24 日（土）に、刈谷駅北口広場で行われ、制作に携わった美術科の学生や関係者が参加しました。

本学と刈谷市駅前商店街の連携で実施され、今年で 6 回目。宇納一公教授（美術教育）の指導で、美術の選修・専攻の 1 年生が毎年、授業の一貫として制作しています。今年のテーマは「サーカス」。1 年生 34 人と 2 年生 2 人が、夏休み前から計画し、テーマや構造を考えて、10 月から制作を開始。象の曲芸や、ライオンの火の輪くぐりなどのモチーフをリアルな立体に仕上げるなど、約 20 点を完成させました。また、今回は通りのところどころに彫刻作品を配置して、彫刻とイルミネーションのコラボも見どころの一つです。

点灯式では、学生を代表して木村祐輔さんが「初めてのイルミネーション制作で苦労しましたが、大物が多くて見応えある作品ができました。元気になるイルミネーションを楽しんでください」、船橋千歳さんも「愛教大に入る前から作りたかったイルミネーション。皆さんに喜んでもらい、刈谷を盛り上げていけたら」とあいさつ。松田正久学長も「間に合うだろうかと心配しましたが、1 年生の皆さんが頑張ってくれました。刈谷市と協力して、本学も元気になって嬉しい。今日はどうもおめでとうございます」と健闘を称えました。関係者の祝辞の後、カウントダウンでスイッチが押されると、色とりどりのライトが一斉に点灯し、街並みを温かな光で照らし出しました。

点灯は 1 月中旬まで、午後 5 時から 10 時ごろまで行われます。

総合防災・防火訓練（11/30）

2012年度の総合防災・防火訓練が11月30日（金）午後3時50分から、第一、第二共通棟、美術・技術・家政棟，グラウンドなどで行われました。授業中の学生数百人をグラウンドに避難させる大規模な訓練は今回が初めて。

午後3時45分、東海地震予知情報が発表されたとの想定で訓練開始。濱田泰栄総務課長が松田正久学長へ予知情報発表を報告。松田学長は非常災害対策本部設置を命令するとともに、学生にグラウンドへの避難の指示を出すよう、訓練の総指揮者を折出健二自衛消防隊長（総務担当理事）に命じました。

午後3時50分、第一、第二共通棟で授業を受けていた学生に避難指示の放送が流れ、午後4時5分には782人の学生がグ

ラウンドに到着し，授業担当教員が学生一人一人の避難状況を確認し、グラウンドで待機していた野田敦敬、西宮秀紀、吉田淳の3学系長に報告。同じくグラウンドに待機していた三浦孝史避難誘導班副班長が集計結果を非常対策本部の山本良夫避難誘導班長に携帯電話で報告した後、午後4時20分、吉田淳防災・防火委員会副委員長の終了宣言により避難訓練は終了しました。

また、事務職員等による防災・防火訓練では、午後3時55分に、地震発生との想定により、本年3月に設置した緊急地震速報システムによる訓練用非常放送が流れた後、非常災害対策本部（学生サポートセンター前）に集結し、折出総指揮者の号令の下、連絡調整班，避難誘導班，災害対策班，救出救護班に分かれ、真剣な表情で各自の任務に取り組みました。一連の訓練の後、消火器の操作説明があり、実際に学生、職員が「火事だ！」のかけ声の後、水消火器による実技訓練を行い、最後に、松田学長の講評の後、非常対策本部の解除を宣言して、この日の訓練は終了しました。

なお、今年は、9月26日（水）に行った井ヶ谷地区役員との懇談会の場において、双方の意見の一致もあり、地区長、市議会議員に本学の防災・防火訓練の様子を見学してもらうこととなり、学生の避難訓練、職員の消火訓練など最後まで見学していただきました。

（総務課　企画評価室長　神谷和征）

愛教人インタビュー

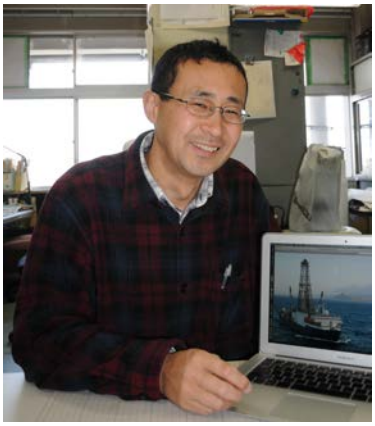
星博幸准教授らの論文が英国科学誌「Nature Geoscience」に掲載

本学の星博幸准教授（理科教育）らは研究論文「ホットスポットはマントルの流動に影響されて個別に移動している」を発表。英国科学誌「Nature Geoscience」に 11 月 25 日（日）〈＝日本時間 11 月 26 日（月）〉に掲載されました。

星准教授と東京大学大気海洋研究所の山崎俊嗣教授らの研究グループで、統合国際深海掘削計画によるルイビル海山列掘削試料を用いた研究により、マントル深部から煙突状に立ち上がる上昇流であるホットスポットが、個別に移動していることを明らかにしました。プレートテクトニクスの確立以来、ホットスポットは不動である、つまりホットスポットはマントルに固定された座標系であるとして、プレートの過去の運動を求めるための基準などに用いられてきましたが、これを見直す必要があります。今後は、ホットスポットがマントルの流動により移動するというモデルに基づいて、プレート運動や真の極移動が構築されることが期待されます。

この論文発表について、星准教授に伺いました。

＊　　＊



Nature Geoscience に論文が掲載になった感想はいかがですか？

―素直に嬉しいですね。論文の発表者は 5，6 人ですが、プロジェクト全体はもっと多くの人が関わっていますから、こうして発表されてよかったです。

この研究はいつからスタートしたのですか？

―2006 年ごろからアメリカの研究者が思いつき、2010 年 12 月～2011 年 2 月まで、アメリカの掘削船に乗り込んで調査しました。30 人ぐらいの各国の科学者、それを支える人たちで 100 人ぐらいが乗り込みました。実験室で 24 時間研究する環境で、掘削した資料のデータを船の中で出すことができました。今回の結果が出た時は、船内が大騒ぎでした。一番嬉しかった瞬間ですね。教科書が変わるぐらいの

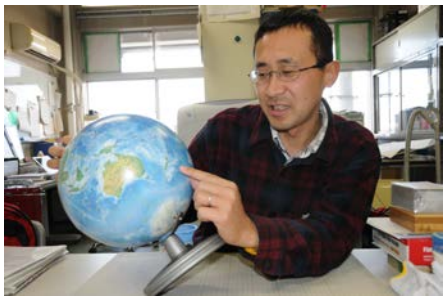
内容ですから。

論文の発表による影響は？

―地球の表面が覆われているプレートが、相互に運動していることが分かれば、プレートが昔どのように動いていたのかを探る方法に修正を迫ることになりそうです。

地震予知などにも関わるものですか？

―今心配される地震より、もっと長い何千万年というスケールです。日本がどうしてできたかというような大きなスケールの、地球規模の話になります。



今回の論文発表で学生に伝えたいことは？

―論文を出すのは大変ですが、われわれは新しい事実を伝えることが大切。そういったことを学生に伝えて、学生が子どもたちに伝えるのだから、（教員の研究する姿は）生きた教材。そうあるべきだと思います。

＊　　＊

詳細は、本学ホームページの新着情報「ニュース」の添付資料をご覧ください。

http://www.aichi-edu.ac.jp/topics/news/2012/2600.html

研究論文は英国科学誌「Nature Geoscience、オンライン 11 月 25 日」でご覧になれます。

http://www.nature.com/ngeo/journal/vaop/ncurrent/index.html

お知らせ・報告・投稿

大学院生の金田早織さんが工芸展で受賞（報告）

本学の樋口一成（美術教育教授）研究室の大学院生、金田早織さん（教育学研究科芸術専攻 2 年）が 10 月に行われた工芸作品展「美濃和紙あかりアート展」一般の部で「選考賞」を受賞しました。

金田さんは学部 2、4 年、院 1 年に続く 4 回目の応募。学部 2 年の時の作品入選が工芸のあかりを選択するきっかけになり、以来、和紙を使ったあかり作品を制作しています。今回の出品作品のタイトルは「結―musubu―」。直径 50 ㎝、高さ 60 ㎝。素材の和紙を型で成形し、その上に 1 枚の和紙をひも状にして結んで模様にしたもので覆いまいした。

制作期間は約 3 カ月。「夏にいとこが結婚したので、結婚をイメージして作品に。7 月ごろから和紙をよって糸にして、“七宝結び”という縁起のいい結びを繰り返して模様にしました。いとこにプレゼントするつもりが、入選したので作品が戻ってこなくなりましたが」と金田さん。作品は 12 月 2 日まで、美濃市の「うだつの上がる町並み」で展示され、12 月には名古屋市の白鳥公園で同アート展の他の入賞作品と共に展示される予定。

現在は 2 月の修了展の作品制作の最中の金田さん。豊田市出身で、来年 4 月からは地元の小学校の教員になる予定。「小学校の授業でも和紙をやりたい。紙という素材は身近なものですが、紙でも立体的なものが作れることが分かってもらえたらと思います。先生をしながら、作品づくりも続けていきたいです」と笑顔で語ってくれました。

また、指導教員の樋口先生にも朗報。2010 年に制作した木の玩具「ころがるおもちゃ『DONGURI（どんぐり）』」が 2012 年のグッドデザイン賞を受賞。ドングリのようにゆっくり動く面白さと、転がる面の傾斜が変えられる独特の仕組みが評価されての受賞。

「既に他の作品展でグランプリを受賞して、スイスのメーカーからも販売されていますが、今回は日本のメーカーが申請したので、受賞

を聞いてびっくり。グッドデザイン賞になったことで、関心を持ってもらえたら嬉しい」と樋口教授。

来年 1 月 4 日まで島根県浜田市での「木のおもちゃ展」にも、卒業生 3 人と一緒に出品中で「先輩たちが頑張ると、後輩たちも頑張ろうという気持ちが伝わってくれたら」と今後の学生たちの活躍に期待を寄せていました。

会計関係事務研修(報告)

本学の会計関係事務研修が 10 月 18 日(木)、11 月 1 日(木)、11 月 15 日(木)の 3 回、第五会議室で開催されました。

この研修は，本学に勤務する全事務職員(特に会計関係事務担当者)を対象に、会計関係事務に携わる事務職員と財務企画課担当者との共通理解の促進と全学的に会計事務についての知識を深め、総合的な事務力の向上を図るのが目的。第 1 回は 44 人、第 2 回は 55 人、第 3 回は 56 人がそれぞれ参加しました。

研修では、財務企画課各担当係長を講師として予算・決算関係、旅費・謝金関係、出納関係、契約・調達(検収)関係と様々な内容で、時には具体例を交えながら行なわれました。

講義終了後の質疑応答では、職員が何人も手を挙げて積極的に質問するなど、有意義な研修会となりました。

今後は会計事務に携わる職員それぞれの知識・事務力向上による本学会計事務の円滑化が期待されます。　　(財務企画課財務総括担当　加藤靖典)

文科省関係機関等教職員駅伝競走大会(報告)

11 月 4 日（日）、第 20 回文部科学省関係機関等教職員駅伝競走大会が東京で開催され、今年も本学チームが参加し、健闘しました。

この大会は、皇居桜田門を起点とし皇居周回コース（5km/周）を 1 人 1 周ずつリレーするものです。本学からは若手女子職員 1 チーム 4 人(情報図書課：稲葉裕美さん，教務課：落合咲貴さん，学生支援課：安藤栄里子さん，人事労務課：藤目光)が出場しました。本学から女子チームが出場するのは、今回で 4 年連続となります。

当日は爽やかな秋晴れとなり、絶好のマラソン日和の下、男子及び混合 56 チーム、女子 16 チームが集まりました。本学の 4 人はお揃いの「食まるＴシャツ」を着用し，チーム一丸となってタスキを繋いだ結果は、1 時間 52 分 13 秒で 13 位。チームとしては，昨年よりもなんと 8 分 48 秒もタイムを縮めることができました。これは，終業後みんなで集まり練習を重ねた成果だと思います。今回は昨年よりも練習量を増やし，2 カ月で約 80km 走りました。ちなみに、優勝は東京工業大学 D チームで、タイムは 1 時間 35 分 39 秒でした。

練習からサポートをしてくれた皆様、応援に駆けつけてくれた皆様に感謝し、来年も楽しく走ることができればいいなと思います。　　(人事労務課　藤目光)

国立大学協会定期総会(報告)

国立大学協会(国大協)の定期総会が鹿児島市のホテルを会場に 11 月 5 日(月)に開催されま

した。国大協の総会は 86 国立大学長に 4 機構（自然科学研究機構など）の機構長が参加して年 2 回開催されますが、春は東京、秋は地方で開催されます。日本物理学会もそうですが、こういう開催パターンが多いようです。会議は前半が総会、後半は文部科学省との意見交換、その後、情報交換会(懇親会)です。前半の総会では、事業報告・理事会報告・各委員会報告の順で淡々と進みました。

協議事項では、役員体制の強化及び国立大学法人を取り巻く諸課題の討論でしたが、いわゆる 15 週の講義と 1 週の試験という規定について柔軟な運用を求める声が多々ありました。また、国大協の在り方について、「ミッションの再定義」など、国大協として、その立場を明確にすべきで、何もしない国大協は存在理由がないなど、厳しい意見交換もありました。高大接続の重要性を指摘する声もありました。また、給与削減問題を巡って国大協として一枚岩の対応が出来なかったことを危ぶむ声もありました。

文科省との意見交換会には、常盤豊官房審議官（高等教育局担当）と芦立訓国立大学法人支援課長が出席、常盤審議官は挨拶の中で、大学もスピード感を持って改革を進めている、社会変化のスピードはそれに勝っている感があり、一層危機感を持って進めてほしいこと、ミッションの再定義は各大学と共同作業で進めていくことなどが述べられた。また議論の中では、国立大学の重要性やその役割を強調する声も聞かれました。

（総会資料は国大協 HP　http:// http://www.janu.jp/　の会員専用ページを参照のこと）
写真上：総会協議の模様。下：総会会場に近い城山で。左から本間謙二北海道教育大学学長、松田学長、村松東京学芸大学学長。　（学長　松田正久）

木村博昭教授が書作品を刈谷市に贈呈（報告）

本学の木村博昭（号・大澤＝ダイタク）教授の書作品が刈谷市長の執務室に飾られることになり、11 月 7 日(水)、刈谷市役所で贈呈式が行われました。竹中良則市長に直接手渡され、書道に興味、関心がある竹中市長との歓談の時間は書の話題で終始和やかでした。

作品は東京銀座の画廊で開催されたグループ書展「七墨―GINZA　SHOW　TIME　書と未来の装い展」（平成 24 年 7 月開催）に展覧された「南山壽」。従来の書作品とは一味違った、現代感覚にマッチした洒落た額装で、その点からも注目され鑑賞された作品。この作品が刈谷市議会議員の鈴木絹男氏の目にとまり、新庁舎の市長室にぜひという運びとなりました。

木村教授は「刈谷市を一望できる素晴らしい新庁舎に、作品を飾っていただけて大変光栄です。〈南山壽〉は、事が末永く堅固に続くという意味で、転じて長寿を祝う言葉。力強く重厚な書風は、この意味に似合っていると思います。刈谷市と愛知教育大が末永く連携し、ともに力強く発展していってほしいと思います」と述べました。

刈谷市は本学と包括協定を結んでおり、竹中市長在任中、市長室に飾られます。

（国語教育講座　教授　木村博昭）

地域連携フォーラム（報告）

11 月 10 日（土）、午後 1 時から本学大学会館で「地域連携フォーラム 2012」が開催されました。

5 回目となる今年は、学生の地域での活動にスポットを当て、「愛知教育大学の地域連携における活動と今後の展望」をテーマに行われました。フォーラムでは、「外国人児童生徒の学習支援」「刈谷駅前商店街との連携」「知立市ハンドボール教室」「地域企業のサポートを受けた活動」などの関係者と学生による報告や、学生のみによる「吹奏楽団の活動」「レクリエーションクラブの活動」「幼児体育教室」の報告があり、本学学生の多方面にわたる活躍に驚かされました。

出席者の中には他大学の地域連携に関する部署の方、地元商店街、行政関係者等、幅広い業種の方々、50 人が参加され、大学の地域連携に対する期待の高さがうかがわれました。また、パネルディスカッションでは、本学学生の地域連携活動の際の問題点や、大学側が学生の活動をいかに捉えて教育に反映させていくか等の問題に関しても意見が交わされました。終了後は、多くの参加者から本学学生の素晴らしい活動や学生自身の認識の高さに感心したとのご意見をいただきました。

（保健体育講座　教授　鈴木英樹）

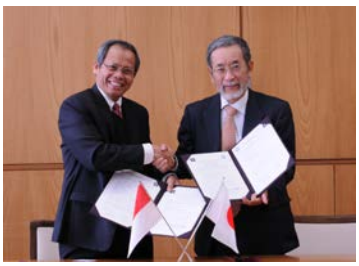
真島聖子准教授が刈谷税務署長表彰（報告）

刈谷税務署管内の税務功労者を表彰する「平成 24 年度税務表彰式」が 11 月 13 日（火）、刈谷市総合文化センターで行われ、本学の真島聖子准教授（社会科教育）が税務署長表彰を受けました。

同表彰は、国税の申告と納税および租税教育等に関して、顕著な功績を残した団体や個人を顕彰するもの。真島准教授は租税教育を授業で取り上げるなどして、「多年にわたり率先して租税教育の推進につとめ、正しい税知識の普及に貢献したことで、将来を担う若者の納税知識の普及に貢献、将来を担う若者の納税道義の効用に寄与するところ多大であり、他の模範とすべきもの」として功績が認められての表彰となりました。

インドネシア・スラバヤ大学との学術交流協定更新と学生交流（報告）

11 月 14 日(水)，インドネシア・スラバヤ大学の役職員と学生から成る訪問団が，本学との学術交流協定の更新及び学生交流を目的として来学しました。



本学とスラバヤ大学の協定は 2005 年 3 月に締結し，以来，教職員の招へいや教員･学生の交流活動を通じ協力関係を育んでいます。更新の調印式には，スラバヤ大学から Muchlas Samani 学長をはじめ役職員 11 人，本学からは松田正久学長，理事，国際交流センター長及び専任教員，スラバヤ大学との交流担当教員が出席し，Samani 学長と松田学長が協定書に署名しました。この後、学長室で懇談会が行われ，より活発な交流活動の推進を目指して今後も互いに努力していくことが確認されました。

（教育創造開発機構運営課国際交流担当　宮内春菜）

＊　　＊

また、14 日（水）から 19 日（月）にかけて、スラバヤ大学で音楽を専攻する学生 8 人がＳＳ

（ショートタイム）プログラムのために来日しました。15 日（木）には本学音楽棟演奏室で音楽科の学生たちを対象に，音楽・舞踊・制作のワークショップを開き、参加者は楽しい時間を過ごすことができました。スラバヤ大学生は伝統舞踊を、音楽科の学生は日本の合唱を披露しました。言葉の壁を越えてとても有意義な文化交流ができました。

16 日（金）には附属岡崎中学校を訪問し、3 時間目に 1 年生と交流会を行いました。1 年生は英語のスピーチと合唱を、スラバヤ大学の学生は衣装を身にまとい、舞踊と演奏、歌をそれぞれ披露しました。午後からは有松絞体験を楽しみながら、日本文化に触れていただきました。さらに 17 日（土）には、東郷町商工会館で東郷町国際交流協会との交流を行いました。

来年 1 月 14 日（月）から 20 日（日）には 6 年一貫教員養成コース 7 期生の学生がインドネシアを訪問する予定です。両大学の学生がさらに親交を深めることができればと思います。（中等・教育学専攻　6 年一貫教員養成コース 7 期生　堤えり）

催しもの案内

◆冬のランチタイムコンサート

12 月 5 日（水）12：30～13：15　入場無料
附属図書館　アイ❤スペース
出演者：音楽教育講座教員　プログラムは当日発表

◆生駒野外実習地　芋掘り・焼き芋大会

12 月 8 日（土）10：00～12：00 ごろ　＊雨天の場合は 12 月 15 日（土）に順延
生駒野外実習地（豊田市生駒町東山 665）
サツマイモ掘り、焼き芋、試食会、希望者には収穫したサツマイモのお土産と販売。
事前の参加申込みを受付中。
問い合わせは学系運営課創造系担当　川嵜さん　℡０５６６－２６－２４１３
または、技術教育講座　太田教授　℡０５６６－２６－２４８７

◆第 78 回愛知教育大学天文台一般公開

12 月 8 日（土）17：00～19：30　入場無料、予約不要
自然科学棟 5 階　地学 538 室
17:00～18：00 天文ミニ講座「流星群ってなに？―ふたご座流星群を直前に迎えて―」
講師：澤武文教授（理科教育講座）、18：00～19：30 観望会「木・天・海の観望会」、「３D 宇宙の旅」上映会
問い合わせ：理科教育講座　天文学研究室
℡０５６６・２６・２６２４
ホームページ　http://tenmon.phyas.aichi-edu.ac.jp/

◆音楽科学内演奏会

12 月 12 日（水）13：30～17：30　入場無料
音楽棟演奏室
学部生、大学院生による恒例の演奏会

◆愛知教育大学天文台「ふたご座流星群特別観望会」

12 月 13 日（木）19：00～22：00　入場無料、予約不要

自然科学棟屋上
問い合わせ：理科教育講座　天文学研究室
℡０５６６・２６・２６２４
ホームページ　http://tenmon.phyas.aichi-edu.ac.jp/

◆第 36 回冬の子どもまつり
12 月 16 日（日）9：00～15：00
第一共通棟、第一・第二体育館など
来場の子どもたちとゲームやクイズで遊び、ふれあうイベント
詳細は、冬の子どもまつりのホームページを参照。
http://www.aichi-edu.ac.jp/gakusei/kodomo_fes/

編集後記

12 月に入って、受験シーズン本番が迫ってきました。広報室では、大学ホームページに受験生を応援する「在学生・学長メッセージ」の映像撮影を完了して、ただいま掲載の準備中です。先週あたりから、入試課の前の廊下には、入試名物（？）のダルマストーブがお目見えして、試験会場での出番を待っています。寒さの到来とともに、学内では入試への準備が進んでいます。受験生の皆さん、これからが正念場。体調を整えて受験に臨んでください。応援しています。

（K）

投稿のお願い

学内外の出来事（教育・研究・地域連携・国際交流・学内事業など）に関するニュースの提供をお待ちしております。
メール：kouhou@m.auecc.aichi-edu.ac.jp 編集責任者：総務担当理事　折出　健二